
ナップザックのふしぎ。

loco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナツプザツクのふしぎ。

【コード】

N1626M

【作者名】

loco

【あらすじ】

超短編集。

なんてことないことこそ尊くって、簡単に手に入れられやしないんだ。

ナップザックのふしぎ。

旅人は言った。

「このナップザックは僕の夢が沢山詰まってるんだ。覗いてごらんよ。」

チャックを開けて覗きこんでも、暗くてよく見えない。

ナップザックを逆さにしてみるが、出てきたのは私が期待したようなものじゃなかった。

それらは衣服や飲料水、薬、地図といった類のもの。

なんだよ、私の鞆となんら変わりがないじゃないか。

「おちよくっているのか？説明してくれ！」

そう私が攻め寄って尋ねても、旅人は答えることはなくただただ笑っている。

その笑顔は、言葉を続けられなくなるくらいパワーがあつて、わたしは何も言えなくなってしまった。

手元には、陸にあがった蛸のように原型を留めていないナップザック

クだけが残った。

*
*
*
*

選別

「ねえ、」それはあまりに唐突な質問だった。
「もし犬と猫が溺れてたらどっちを助ける？」

「どっちって…選べないよ。両方共助けたい。」

すると彼は膨れっ面になって、「どうしても片方しか選べないと仮定して、だよ。」と言った。

「じゃあ、猫…、かな。」

「どうして？」

「犬は泳げるから…。」

「ふーん。もし犬が泳げなくて猫が泳げたら？」

「そしたら、犬を助けるよ。」僕は反射的に答えてしまった。

しまったと思うと同時に、彼は「なるほどね。じゃあ二匹共、泳げないでしょう。」と意地悪な提案をしてきた。

「……………なんでそんなこと…」

「ばかだね、君は。いいかい、これは別に犬や猫じゃなかったっていいんだよ。なんなら、僕をいま無視するかしないかだっていい。」

僕は下を向いた。

「選択するのは君だ。誰でもない、君だの自由だよ。だから誰からも咎められる必要はないんだ。ただ、責任を持って答えてほしい」

もう一度聞くよ、というかのように深呼吸して、言った。

「犬と猫が溺れていました。君はどうする？」

目をぎゅゅって瞑る。僕の答えてなんだ？どうしたいんだ、僕は。

すると彼は今までにない強さでもう一度言った。「なあ、どうする？」

僕は顔をあげて、彼を直視する。

…正しくは、することに決めた、のだった。

そう、僕の意味で。僕の判断で。

ヨルノオト。

夜になると、ガタンガタンと電車の走る音が聞こえてくる。

線路から遠く離れたこの家にまで届く音。

夜の澄みきった空気のせいなのか、丘という地形が反響させているのか、単に昼間の騒々しい音が隠していたのか定かではない。

ただひとつ目の前にある事実は、夜にだけ出会える音があるということ。

そうか。

これが夜の音なんだ、きっとそうに違いない。

壁時計を見ると時刻は24時6分。

もうすぐだ。

もうすぐで夜の音が僕の町にもやってくる。

瞳を閉じて、今日あったことを思い出す。

思いがけない再会。

優しい声。

野菜いっぱいポトフ。

偶然のマジックアワー。

そんなことを考えていると、突然夜風がふき、鼻をツンとさせた。
冷たくて、なんだか懐かしい。

24時8分。

ガタンガタン。

夜の音が今日も遠くから響いてきた。

孤独と永遠。

なくならない飴みたいだ

やまない雨みたいだ

何層にも重ねた鏡みたいだ

壊れたりリセットボタンみたいだ

みんな気付いてない

朝が来ない夜なんてない、なんてバカげたことをいつてる

僕だけが気付いてる

気休めなんかいらない

終わりはいつだ

始まりを見たか

僕は動かない

僕は躊躇わない

僕は惑わされない

飛べない鳥みたいだ

永遠に廻り続けるメリーゴーランドみたいだ

さまよい歩く森にいるみたいだ

頑なに世界を拒む僕みたいだ

僕は信じない
僕は揺るがない
僕は叫ばない

でも

きつと僕は泣く

シグナル。

彼女はぴよんぴよんと跳ねるように歩く。

「わたしはね、「彼女は躊躇することなく堂々と言ったのけた。」
地球のうさぎになるの」

「ち、地球のうさぎ…?」

あまりに突拍子もない台詞だったから、声の上擦っていたかもしれない。それでも気にとめる風もなく彼女は話を続けた。

「そう。わたしはここよ、ここにいるのよ、ってシグナルを送ってるの。」

現実味のない答えに僕が思わず吹き出すと、彼女は膨れっ面になって睨んできた。

「ああごめんごめん。ね、じゃあさ、一体誰にシグナルを送ってるというんだい?」

「宇宙によ！」彼女は当たり前じゃないのと言わんばかりの口調で言った。

…宇宙、か。

なんてスケールの大きい話だろう。

こんな小さい体で宇宙にメッセージを送っているなんて。

ぴよんぴよんぴよんぴよん。

彼女が跳ねる。

ぴよんぴよん。

つられて僕も跳ねてみた。

「ふふ。あなたも宇宙にシグナルを送ってるの？」

ぴよんぴよんぴよん。

(なあ、知ってるかい)僕は心の中で答える。

(僕は跳ねてないだけで、いつだってシグナルを送っていたんだよ。

)

(…君という惑星にね。)

*
*
*
*
*

決別の森。

イラついたって何も変わんねえよ、と俺は俺自身に言い聞かせる。

俺の名前は、サトウタカフミ、と言うらしい。

本当かどうかなんて分かんねえ。なんてったてこの森に入ってから記憶がねえんだ。いつからここに居るのか、どうやって抜けるのか、誰と来たのか、つーかそもそも何でここに居るのが一番分かんねえ。

なんで名前が分かったかというのと、ポケットに入ってた手紙のおかげだ。

“サトウタカフミ”様宛てに書かれた手紙を俺が持つてるってことは、つまり俺が“サトウタカフミ”様ってことだろ？

ちなみに差出人は“森川”とだけある。誰だよ、モリカワって。

手紙を開くと短く“湖に来い”と急いでペン走らせましたって筆跡で書いてあった。読めなくないが、まあキレイな字じゃないわな。そのくせ、この“森川”ってやつ、自分の名前だけ丁寧に書くのな。いるいるこーゆーやつ。

…と、いうわけで今に至るわけですがね、30分歩いたところで気付いたわけ。

…湖ってどこよ!?

手紙にゃあ不適切に地図も同封されてたけど、なにが不適切って現在地が分かんねんだよ。それに自慢じゃないが地図は読めない。読めない上に現在地が分からない。イラつくねえ。

そもそもがさ、湖に行ったらどうなるとか、なんで来てほしいのかハッキリ教えてほしいね。俺、訳もなくさ迷うのってマジ堪んない。あーあ、女でもいれば全然別なんだけどな。

眞実は分かんねえ。

でも行くしかないんじゃないの。だってさあ、ほかに頼るもんなんかないんだもん、いまの俺。やってやるうじゃないの。待ってる“森川”!

よし、そうと決まったら、とりあえず進め。

進め、俺。

死に際の魂。

田舎のばあちゃんが倒れた。

近所のスーパーで買い物を終え店を出ようと荷物に手をかけた瞬間
だったらしい

バタツと倒れて、それから意識がない

あしたはテスト2日目だったけど、いてもたってもいられなくなっ
て俺は制服姿のまま電車に乗り込んだ

所持金5611円。

よし、ギリギリ行けそうだ。

病室に入ると顔面蒼白で祈りを捧げる伯父さん夫妻と父さんがいた。俺に気付くと、来てくれたんだね、とか細い声をあげて部屋に招き入れる動きをした。

俺はゆっくりと足を進めた。疲れていたわけじゃない、こわかったんだ。生を、死を、鼓動を、こんなに近くで感じることもなんて今までなかったから。

久しぶりに見るばあちゃんは昔より太っていて、病気で浮腫んでいるのかと思ったが、体型が変化するくらいの長い間会いに来なかったのだなと思い知らされてしまった。

確か以前会ったときは中学生だったっけ。

僕は高校にあがるとやれ部活だ、やれ塾だ恋愛だと言って足を運ばずにいたのである。

こんなにも会ってなかったというのに、顔を見た刹那に色んな感情と記憶が湧き上がってきた。

訛りの強いばあちゃん。俺、外国語と同じくらい聞き取りづらかったよ。

カラオケが好きで人のマイクをぶんどつてまで歌うばあちゃん。でもその不思議な笑顔でみんな許しちゃうんだよなあ、

煮物作りが天下一品のばあちゃん。ばあちゃんの料理は山の幸が豊富な和食が多いから、俺、むかし好物のドリアが食いたってばあ

ちゃんのこと困らせたことがあったね。

ばあちゃんばあちゃんばあちゃん…

ばあちゃんは俺のことどう思ってた？

顔も見せない、会っても会話が続かない、甘えてこない、そんな俺でも愛しく思ってくれていた？こんな孫でも会いたいって思ってた？

ねえ、ばあちゃん…

不思議だな、と思った、

こんなに手は暖かいのに、まだ心臓は動いているのに、なのにそれだけだ

応えてくれない。

確かにここにいるのに、でも不思議とここにはいないみたいな感じなんだ。

ガタガタという音がするもんだから、ふと窓にむけて顔をあげた

なんだあれ、

ものすごい速さで雲が流れていく

赤と青と白のコントラスト

動く水彩画かのようにその姿は綺麗で神々しくて少し恐ろしい

まるでどこかへ急いで向かっているみたいに雲は動き続ける

ふと、この雲と同じように、ばあちゃんの魂も行き場を探してもがいているのかな、と思った

この死に際で生きるか楽になるか選択肢を決めかねているのだ。体だけを現世に残したまんまで。

そう思うと、頑張って生命を繋いで、といたかったが言えなくなつてしまった

ばあちゃんは俺に言われるまでもなく、もうすでに頑張ってきた人だったから

だから、

魂が完全にあつちに行かない今のうちに伝えたいことを言わなくちゃいけない

ありがとう、って

大好きだよ、って

言わなくちゃいけないんだ

帰りに、伯父さんからレシートを買った。ばあちゃんが倒れてたときのレシート。

それを見て、俺、涙止まらなかった。電車の中で人がいつぱい目立つつてのに、全っ然止まんないの。ばあちゃんのことを思って泣いた。俺って幸せモンだって思って泣いた。ばかだなあと少しはにかんで、でも泣いた。

隣の席の女の子が心配そうにみてる。やばい、恥ずかしい。なんだろうつて顔して覗きこんでくるから、クイズです、と言ってレシート渡した。

少しして女の子は閃いたように笑って言った。

「今日ドリア作られるのね？」

白いシャツ。

白いシャツが風に揺れている。

ハンガーだけがそれを留めておく命綱だった。

新緑の季節はなんてゆうか、むずかゆい。

変にクラスに馴染んできて、変にリーダーシップとるやつとか友達
の輪から浮き始めるやつとか。

あれ、こいつなんか違うな、
なんてそんな簡単な感情からそれは始まってしまっただ。

私は白いシャツ。

ゆらゆら揺れる、右へ左へ。前へ後ろへ。

周りに惑わされて揺れるたびに見える景色が簡単に変わる。

必死なんだ。

この場に留まれるかどうか。

わたしの命綱、それはなんでしょう。

それを手放した瞬間、わたしはもう揺られてはいらなくなるから。

だから、わたしはハンガーを大事にしないといけないね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1626m/>

ナップザックのふしぎ。

2011年10月7日12時41分発行